

## 高蔵寺ニュータウン開発計画に及ぼした自然環境構造の影響

Effects of the natural environmental structure on the Kozoji New Town development plan

篠沢 健太\* 宮城 俊作\*\* 城地 園子\*\*\*

Kenta SHINOZAWA Shunsaku MIYAGI Sonoko JOCHI

**Abstract:** Kozoji New Town is one of the earliest large-scale residential developments in Japan. The plan was based on a land readjustment project which took into consideration natural disasters such as Typhoon Vera, large-scale developments such as the Aichi Canal, and social situations such as the advance of motorization. The master plan for Kozoji New Town changed over time while continuing the search for an ideal form of replotting design and solutions for problems with the transport plans in consideration of the natural environment of the site, but eventually a unique plan was realized incorporating the valley's large-scale main roads and pedestrian ways on the ridges branching out from the regional center which is concentrated in the one spot. In the process of changes in the master plan, the 'natural environment' of the site had considerable influence on the shedding of the neighborhood unit theory, the concentration and density of population and facilities in the centre and the pedestrian way connections. As Kozoji New Town made the local natural environment the fundamental structure of the new town, it became an opportunity for great changes in the attitudes towards planning spatial structures in subsequent new town planning, while continuing some development ideas from early New Town planning.

**Keywords:** Kozoji New Town, master plan, original landform, Landscape design, natural environmental structure

**キーワード:** 高蔵寺ニュータウン, マスタープラン, 原地形, ランドスケープデザイン, 地域環境構造

### 1. はじめに

高度経済成長時代に建設された大都市圏近郊のニュータウン(以下NTと記す)は、現在建替の時期を迎えている。少子高齢化時代の現在、NTの課題は多岐に渡っており、研究も増えつつある。ランドスケーププランニング、デザイン分野においても、近年、建替を機にかつてのNT計画およびNTの公園緑地計画を再認識し、新たな理解を試みる研究がみられる。NT開発時の空間計画と計画基盤である自然環境の関係を読み解き、どのような計画思想に基づいて計画がとりまかれたかを再認識し、今後、少子高齢化を迎える地域における社会資本としてのNTのあり方や建替の方向性、新たな可能性を検討する研究が進められつつある<sup>1)2)</sup>。

公園緑地計画の視点からみると、NT開発の変遷は、自然環境の特性がNTの空間構造や都市機能と意図的に関連付けられ、内化された港北NTのグリーンマトリックスシステムにおいて、1つの頂点を迎える<sup>3)4)</sup>。一方、初期のNT開発では技術的、経済的制約や地域の社会条件の影響を受けつつ、自然環境が非意図的に空間構造に組み込まれることがある<sup>5)</sup>。この自然環境の非意図的な組み込みが意図的な計画へと成熟する過程で、NT開発思想にどのような変化が生じたかについては未だ十分議論されてはいない。

本論ではNT開発と自然環境の関係の変換点として高蔵寺NTを取り上げる<sup>6)</sup>。高蔵寺NTの計画史については、すでに計画に主体的に関わってきた都市計画家、高山英華によってとりまとめられている<sup>7)</sup>。また公園緑地計画に関しては村田(1966)が報告し<sup>8)</sup>、権ら(1994)は保存緑地に対する住民意識調査を行っている<sup>9)</sup>。西山・石浦ら(1989)は2時点の住民意向の把握に基づいて名古屋都市圏との関係から高蔵寺NTの特質を把握した<sup>10)</sup>。こうした住民意向や住み替え意識など生活に即した調査研究の蓄積があるのに対して、高蔵寺NTと自然環境との関係を直接扱った既往研究は限られる。山元(2009)は、地図資料を用いて高蔵寺NTの造成前後を比較し、高蔵寺NTの都市構造と地形の関係を50mメッシュ単位で検証した<sup>11)</sup>。一般に知られている尾根・谷と歩道・幹線

道路との対応にとどまらない、詳細な土地造成の存在を明らかにし、安全性への影響を指摘したが分析および住民への情報公開の精度を課題としている。

前世紀末から立て続けに大きな災害に見舞われてきた我が国は、現在、都市と自然環境との関わりについて、より繊細かつ真摯に考えなければならない時期を迎えている。高蔵寺NTも計画の発端には都市への自然災害があった<sup>12)</sup>。1959(昭和34)年、名古屋地域に多大な被害をもたらした伊勢湾台風は、低地域に住むことの問題を浮き彫りにした。高蔵寺NTのキャッチフレーズである「丘に住もう」には、単に都市のスプロールを避けて郊外に居住するという意味のみでなく、自然災害を乗り越え「我々はどこに住むべきか?」という切実な思いがある<sup>12)</sup>。高蔵寺NTについては、これまで海外の事例や他のNT開発との比較から、新たな交通体系や高密度な都市居住など、NTの機能から議論されてきた。しかし、自然災害の経験に端を発し計画された高蔵寺NTは、立地の自然環境と取り組み、災害を克服すべく対処する試みの過程が、計画の変遷として図面に示されていると考えられる。本事例研究はそこに潜む計画意図、開発思想を読み解こうとするものである。また近年、一見安定した現況地盤においても、造成の切盛境界や高盛土部などで大規模な自然災害が発生し、開発前の原地形と開発との関連が顕になっている。建替時期を迎えるNTの一つである高蔵寺NTにおいて居住の安全面からもかつての計画を把握する必要は高まっていると、筆者らは考える。

そこで本論では、①ランドスケープ計画・デザインの視野から高蔵寺NTマスタープランの変遷を把握し、②特に地形・地質などの自然環境の要因がマスタープランの変化に及ぼした影響を与えたか?を明らかにした上で、③NT開発思想に生じた変化の検証を試みる。

### 2. 対象と手法

#### (1) 高蔵寺NTの概要

\*工学院大学建築学部 \*\*奈良女子大学生生活環境学部 \*\*\*マルモ出版

高蔵寺 NT は日本住宅公団（現：UR 都市機構）が初めて計画開発した大規模 NT である。計画は、1951（昭和 36）年より開始され、当初計画面積 847ha（のち 702ha）、計画人口は約 2 万戸、8～10 万人を想定して計画が進められた。用地の全てを買いあげる一団地の開発やその後の新住宅市街地開発事業と異なり、土地区画整理事業として整備したため、土地を所有していた多くの地権者に対し換地を行う必要があった。また自家用車の普及が始まった時期にあたり、モータリゼーションを受け入れうるまちの構造が要求された。

さらに当時、世界銀行の支援に基づく一大国家プロジェクト、愛知用水が愛知県下で広域的に計画中であった。木曾川から渥美半島にかけて愛知県を南北に縦断する愛知用水は、春日井市の高蔵寺 NT 対象地の直下を通り、NT に水道用水を給水する一方で、宅地や道路地盤高との調整が必要とされた。また対象地の一部には自衛隊施設が含まれ、その移転計画が計画の前提となるなど、大規模な土地利用の転換も想定されていた。

### （2）高蔵寺 NT 計画の特徴

高蔵寺 NT 計画の特徴は、①サービス施設や機能を NT 中心施設に集約するワン・センター・システム、②地形の起伏を用いた歩車分離型の交通系統、③谷筋に配され、センターから放射状に地域外に開放される幹線道路、④尾根上の歩行者動線に沿って機能と高層住棟を集中して配したペDESTリアン・ウェイの 4 点に大きくまとめられる<sup>7)</sup>。こうした、NT の機能的構造を“骨太”に強化していく NT 計画の思想は、その後の NT 開発に少なからぬ影響を及ぼしたと一般には考えられている。

### （3）手法

上記のような高蔵寺 NT 計画の変遷を、自然環境との関係性から読み解くことが本論の目的である。「高蔵寺ニュータウン計画」<sup>7)</sup>では、マスタープランは 1961 年～1962 年の間に 4 つのフェーズで変遷したと記されている（6106, 6111, 6206, 6212 の各案）。最終的な第 2 次マスタープラン（6401 案）は、その後さまざまな事情により変遷して実施案<sup>13)</sup>に結実するが、本論では 6106～6401 案の 5 案を主な検討の対象とした。

自然環境との関係を把握し、相互に比較・検討するための手法は極めて単純である。各マスタープラン案検討の際に描かれた土地利用、交通、施設、緑地など計画主題図を、立地の地形的特徴を表した基盤図にオーバーレイしそれぞれの計画の特徴、とくにその策定に影響を及ぼしたと思われる地形的特徴を、ランドスケープデザインの視点から再検証する。高蔵寺 NT 計画における立地の地形的特徴を示す基盤図として 6111 案策定時に作成された尾根図を用いた<sup>14)</sup>。

上記の検討結果を NT 開発マスタープラン変遷の年表としてまとめた（図 1）。

## 3. 高蔵寺 NT マスタープランの変遷と自然環境構造の関連

### （1）6106 案 計画単位としての住区

高蔵寺 NT の最初のマスタープラン検討案である 6106 案では、マスタープラン策定と同時に土地区画整理事業における用途選定と買収の指針が検討された。対象地内の「3 本の尾根に囲まれた谷底低地」に 3 つの住区（L1 繁田川流域、L2 鎌茂川上流域・高森山、L3 鎌茂川下流域・自衛隊国有地）が設定された。まちの入口と考えられていた JR 中央線より最も奥に位置する高森山周辺 L2 地区に地区センターを、その他 2 地区にサブセンターを配置する計画であった。3 住区の大きさは谷底低地の広さによって異なっており、住区を規定する一定の空間単位は見られない。一方、住区周辺、北の大谷川、東の鹹川に延びる尾根の先端に配置された民有地（民間戸建住宅地）Lp は周囲の「既存集落と同じ規模」として 500 戸の単位で設定された。

交通に関しては、谷の出口を取付口として、幹線道路 Ta が外部と接続された。幹線道路は、これらの取付口から直線状に延び、高森山麓に設定されたセンターへ、地形とは無関係にアプローチしている。この道路線形は尾根を削り、谷を埋める大規模な造成の必要性は予想されていたが、計画構想段階の 6106 案では、新たな都市像の模索が優先され、あえて尾根をオープンカット<sup>15)</sup>して新たなまちを印象づけることが心がけられた。公園緑地 Os については、対象地内の 4 つの山と自然公園をつなぐ体系的な公園緑地配置が想定されている。

### （2）6111 案 ワン・センターへの移行と尾根地形の発見

第一次マスタープランと呼ばれる 6111 案は、土地区画整理事業の基本条件の検討を課題の一つとし、縮尺 1:10,000 で計画されている。土地購入が開始され、計画人口が 8 万人に決定された。

6106 案で各住区内に配置されていた公共機能を住区から分離、サブセンターを廃止して独立した 1 つのセンター CC に機能を集約する形となった。センター地区は、「身洗川の谷筋」の「東西に狭小で南北に長い痩せ尾根」地形上に細長く伸びた形状で配置された。このワン・センター・システムの形状は前 6106 案では「この谷筋を見落としていたのだが…（中略）…ここにセンターをおくのがよいという結論に達した」<sup>16)</sup>と述べられているように、地形的な制約の影響を強く受けている。一方「3 つの住区は主幹線道路にぶらさがり形態」となったが、これは「開発プロセスと現在自衛隊のしめている国有地が当面計画から外されても、一応機能しうるパターンを考慮して」<sup>17)</sup>のものだった。

6111 案では、歩車分離と都市構造のわかりやすさの原則が確定し、NT 主幹線を谷に、緑道を尾根に配置されている。センターと住区をつなぐ枝の部分はモール m と呼ばれる歩行者専用道路となっている。日常生活の利用頻度が高い施設は住区内に分散させるが、その他の施設は「できる限り」センターに集中させる方針であった。このモールと一部並行、一部独立して尾根上に緑道 g が計画された。なお 6111 案の住区幹線道路 Tb は、後の案に比べるとややいびつな環状となっている。尾根地形との対応が見られるとともに後に提案されるフォーク状の道路形状との関連も示唆される。

### （3）6206 案 オープンコミュニティ

6206 案は、6111 案の空間構成を継承しているが、その計画思想の面では大きな変化が見られる。それまでは、住区を基本単位とする近隣住区論が計画思想の根底にあった。一方、6206 案では、オープンコミュニティと呼ばれる、より流動的で開放的なコミュニティの考え方、生活像が提唱された。住区がある単位にまとまるのではなく、相互に連携する「アソシエーションプラン」が基礎となり、空間単位（住区）から機能のネットワークへ計画思想がシフトした。この結果、住区のみならずは図示されつつも、住区とセンターを結ぶ、特に尾根軸の歩行者動線の連続性、機能強化が進み、最終的には住区に人口を均等に配分するのではなく、センターから徒歩圏内に人口を集中させるよう、住棟の高層高密度が進められた。

歩行者動線は、モールからペDESTリアン・デッキ Pd と呼び名を変え、センターと住区を結ぶ機能的で高層高密度な建築が並び立つ歩行者空間が形作られた。一方、緑道に沿って公園・教育施設が配置され、「アソシエーションベルト Ab」が構想される。とくに東側尾根に形成された緑道と公共施設の帯は、後に港北 NT で実現するグリーンマトリックスシステム（以下 GMS と記す）との共通性もみられる。なお谷沿いの幹線道路は前案を継承しているが、住区内幹線道路のループ形状はより単純化されている。

### （4）6212 案 ループから開放系へ

土地区画整理事業の調整のため、縮尺 1:6,000 で検討された。1962 年 8 月には、日本住宅公団から NT に関連する 5 つの研究が

外部委託され、開発の根拠が裏付けられた時期でもある。

この6212案で、高蔵寺NTマスタープランは住区クラスター型から開放的な機能軸型へと大きく変化した。6106案で対象地境界部分の谷の出口にとりつけられたNT幹線道路Taはセンターが配置された尾根に沿う谷筋に配置され、接続する住区幹線道路Tbは住区内でループ状に完結していた(6111, 6206案)。住区を囲む尾根には歩行者専用道路である緑道が配置され、それに隣接して学校や公園などの公共機能が集約されていた(6206案)。この外部に閉じた計画に対し、6212案はNT・住区幹線道路を「開いても何らさしつかえない」<sup>18)</sup>という判断から、環状の道路体系がセンターから周囲にY字状に広がって外部へ接続される「開放系」の体系へ変化する。これは6206案で提唱されたオープンコミュニティの考え方にも後押しされた。

ペDESTリアン・デッキと緑道も明確に機能分担されはじめる。6206案で緑道gと並列していたペDESTリアン・デッキPdは、センターへの徒歩圏での到達範囲をより拡張するため、より機能的に尾根をつなぐ「ペDESTリアン・ウェイ」として確立される。6212案で南北に伸長されたセンターから住区内へ、幹線道路に並行して尾根上を伸長していく。一方、公団開発地と民有地の住区境界の尾根に配置されていた緑道は、動線とは別の計画思想で議論されるようになり、6206案での「帯」から施設が外れ、幅の細い外周道路へと変化した。公園緑地に関しては住区基幹公園として、誘致圏や規模が検討されるようになる<sup>19)</sup>。

#### (5) 6401案 第2次マスタープラン

1964年1月、3工区からなる第2次マスタープランが完成した(面積847ha)。6401案の特徴は①谷を結んでNT主幹線道路を配置し、沿道の緑地と一体化する(6106, 6111案)、②主幹線に沿った尾根上にセンターを配置(6111案)、歩行者専用道路「ペDESTリアン・ウェイ」を住区内に枝状に伸ばし、到達しうる徒歩圏を拡大する(6206, 6212案)、③ペDESTリアン・ウェイに高密度な中高層住宅地を配置するとともに諸都市機能を集中させる(6206, 6212案)、④高密度な土地利用の北側にオープンスペースを配置、都市の背景を作る(6212案)、⑤一方、「できる限り地形の高い位置」でオープンスペースを確保するという点にあった。

6212案でY字型の幹線道路が伸長するのに伴って変質した緑道が中高層北側に沿ってペDESTリアン・ウェイと並行して現れる。同時に幹線道路に並行するペDESTリアン・ウェイに直交し、その間をつなぐ形で歩行者専用道路と学校・公園緑地の帯状の配置が一部、東側尾根筋の旧緑道部分に復活している。

#### (6) 実施へ計画対象区域の切り離し

マスタープラン策定後の整備の過程や工事に関する詳細な議論は本論では扱わない。但し、マスタープランと実施計画とは、高蔵寺NTの計画範囲で最も大きく異なっている。敷地南東側の国有地は第2次マスタープランでは第3工区に位置づけられていたが、国有地内の航空自衛隊高蔵寺弾薬庫の移転が中止となり、第3工区145haが計画から除外された。対象地の約2割を占める範囲が切り離されたその結果、高蔵寺NTは北東から南西に延びるやや変則的な形状となり、計画されていたY字型住区幹線道路の枝が3箇所から2箇所に減る結果となった。しかし対象地域の削減という大きな変更に対しても、高蔵寺NTの街としての機能に大きな問題を生じなかったのは、住区、サブセンター、地区センターへ分散した機能型の近隣住区論ではなく、機能を1箇所のセンターに集中しつつ、各住区とセンターとの機能的な繋がり、アプローチを確実なものとしていた高蔵寺NTマスタープランの空間計画が強く影響しているものと思われる。

## 6. 考察

### (1) 地形に基づく空間単位—千里NTから高蔵寺NTへ—

高蔵寺NTの開発計画においては、計画マスタープランの変遷に伴い、その計画思想も大きく変化していた。本論での議論の対象である自然環境構造、特に地形が計画に及ぼした影響は大きい。計画前後およびそれ以前のNT開発と比較して、地形が影響を及ぼした点の1つに計画の「空間単位」がある。高蔵寺NTより以前に開発された千里NTでは、マスタープラン策定時に地形に基づいた空間単位が参照されたことが指摘されている<sup>20)</sup>。千里NT開発当初、「一つ尾根を飛ばすと」適切な敷地が得られることが報告され、近隣住区を意識した均質な単位空間が谷区画割図を下敷きに設定されていた。高蔵寺NTでは当初は尾根に規定された3住区が設定されたが、その際、千里NTの谷区画割図のような均質な単位空間は設定されなかった。一部、外周の尾根斜面に配置された民有地では、周辺集落規模に応じた住戸数の楕円が並ぶものの、立地の自然環境に規定されてはいない。これは高蔵寺NTの立地が長い尾根が敷地南北に延び、単位を規定しづらいことに起因すると考えられる。また、当時は人々の日常生活圏が近隣住区より広いことなどが議論されつつあり、NT開発計画における計画単位としての近隣住区論の単位性、拘束力が弱まった時期でもあった<sup>21)</sup>。

### (2) 機能の軸—痩せ尾根地形の発見と流す尾根

空間単位に束縛されず、一方で柔軟性のあるマスタープランが求められるなか、高蔵寺NTは機能の連携を強く意識した計画へと変化していった。その際、立地の地形、尾根・谷が、機能の流れ、軸に影響を及ぼしていた。谷筋については、千里、高蔵寺NTとも幹線道路が配置される点で共通しているが、千里NTでは農業用水の水利権が残るため池が計画に強い影響を及ぼした<sup>22)</sup>のに対し、高蔵寺NTでは対象地の水田面積割合は低く、また新たに愛知用水が完成することもあり、ため池のNT計画への制約は強くなかったと思われる。広域計画である愛知用水の影響は本論では明らかにできなかった。一方、尾根は、計画が大きく転換するセンター立地とペDESTリアン・ウェイの延長に大きく関与した。センター配置のきっかけは、6111第1次マスタープランにおいて6106案が「見落としていた」脆弱な尾根が発見されたことにあり、それまで直線状に描かれていたNT幹線道路が、この尾根に並行する谷に沿って、緩やかに曲線を描くように配置される。一方センターから住区に至る歩行者動線は尾根筋に配置され、モール、ペDESTリアン・デッキ、ペDESTリアン・ウェイと名前を変えつつ、主要機能などを集積しつつ機能の軸を形成していく。最終的に充実した機能の軸をもつ「骨太」のマスタープランが形成される過程で、地形を読み解き、発見し、利用、適応していく変遷を確認することができた。さらに微細な地形の取り扱いやランドスケープデザインについては、別途検討が必要になる。

### (3) 枝の切り落とし

高蔵寺NTにおいて特筆すべき地形との関連の3点目は、計画の変更に対応できる計画の柔軟性にある。当初から南東側の国有地の用地取得が課題であり、6111案でもその問題が指摘されていた。高蔵寺NT計画においては計画に柔軟性をもたせるためにも、空間単位に依拠する近隣住区は有利でなく、機能を集約させるワン・センター・システムと開放系の交通動線が必要だったとも言える。センターを独立させ、空間構造から機能の連携へのシフトに拍車をかけたのは高蔵寺NT敷地の地形であったが、最終的にセンターから伸びた機能の枝を切り離しても、NT全体に大きな破綻をもたらすことはなかったのも、機能を集中させる断面形状をもち、さらに対象地を放射状に連結することができた尾根地形の影響が少なくない。

### (4) グリーンマトリックスへ

センター地区から延びる尾根に機能が集中し、高層高密度な住居と機能を沿道に集中させたペDESTリアン・デッキが形成される一方で、6206案では高蔵寺NT東側の尾根筋に緑道と公共施設の

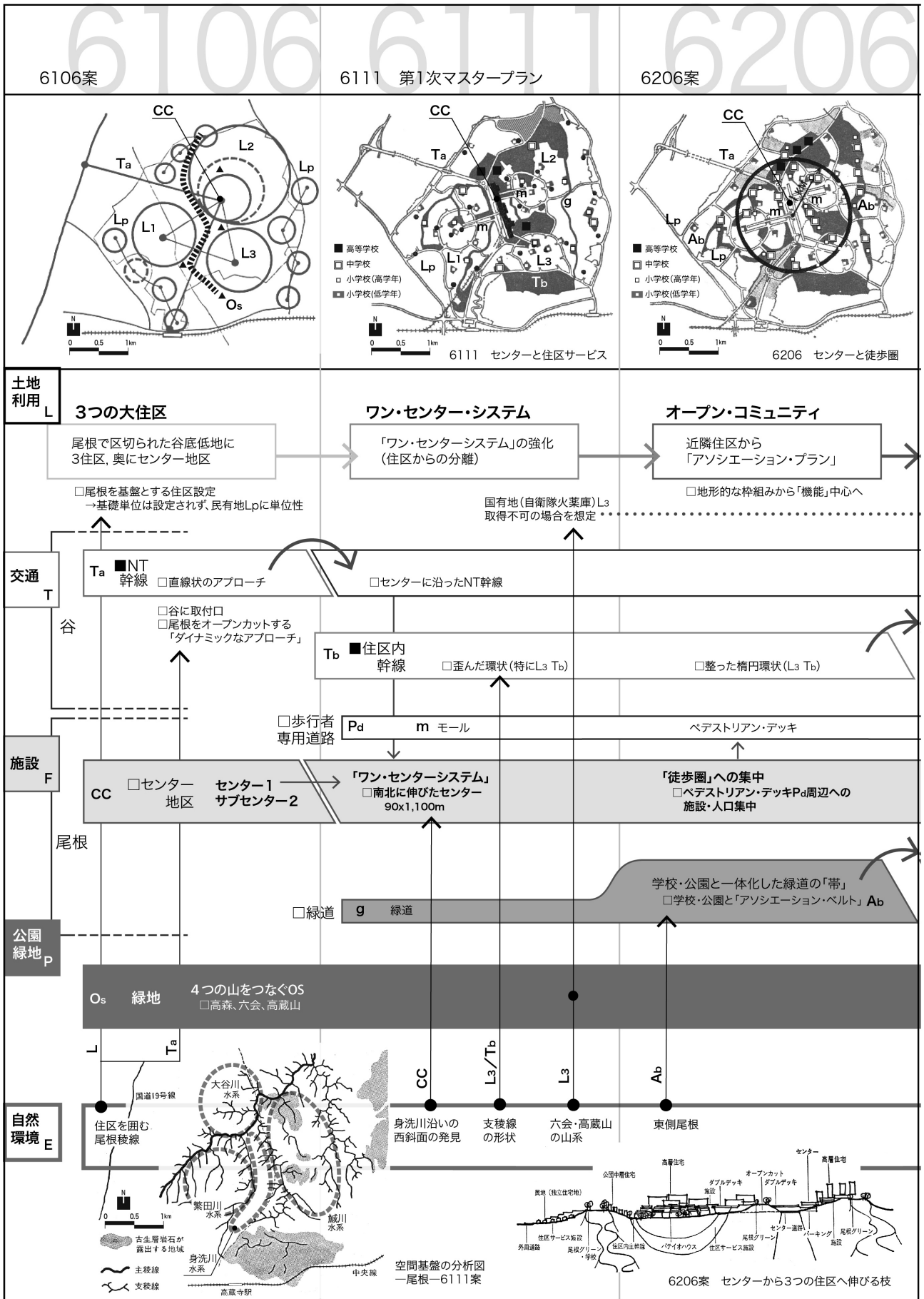
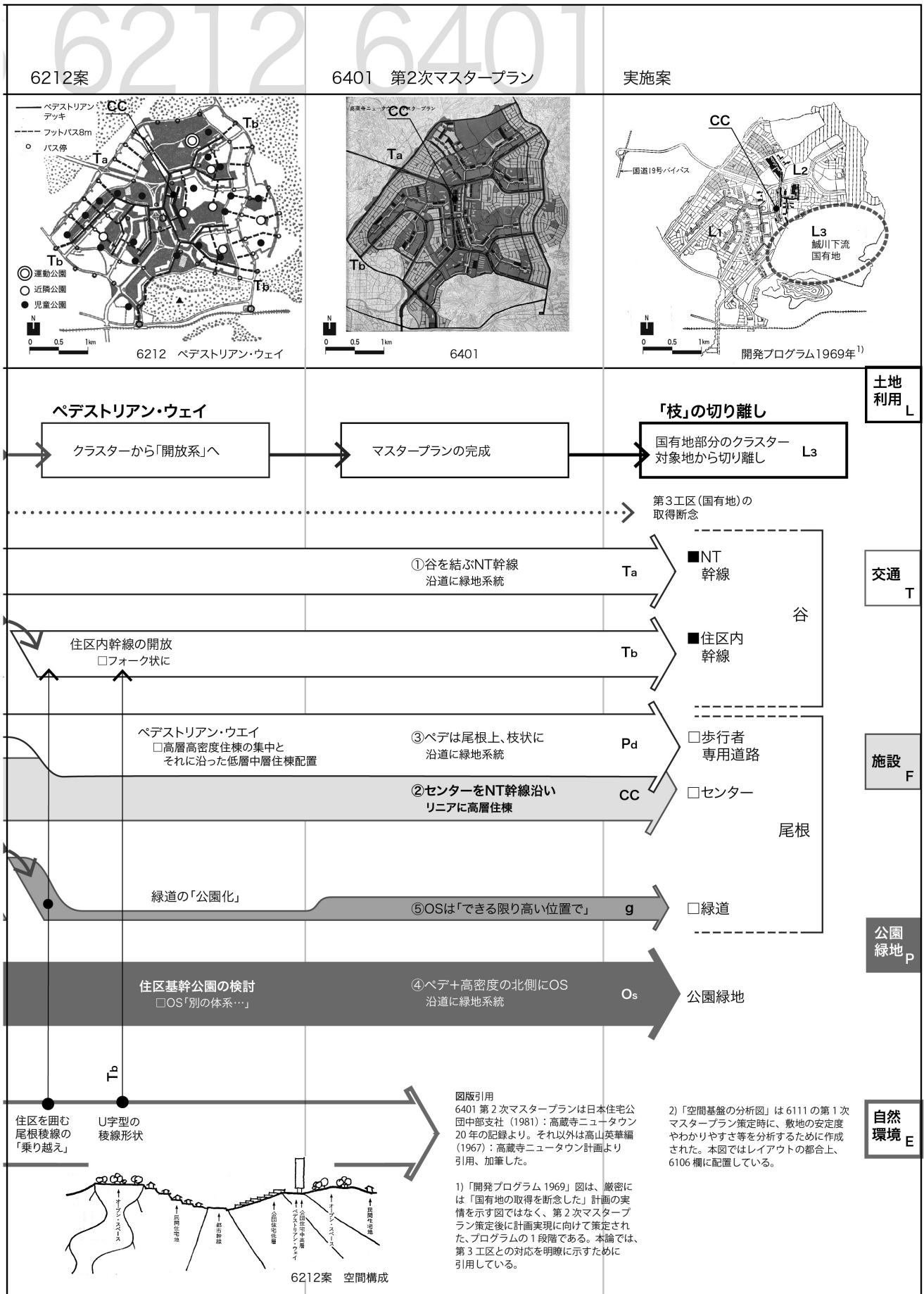


図1 自然環境の影響から見た高蔵寺ニュータウン開発計画の経緯



帯が形成された。これは学校や公園緑地をつなぐ歩行者専用空間で、センターから放射状に延びる機能の軸と並ぶ歩行者空間だった。しかし6212案において住区幹線道路が放射状に開放されるとペDESTリアン・ウェイが拡充されるのに対し、緑道はその質を変え、機能をもつ帯としての緑道は消失する。再び6401案で若干の機能連携が見られるが、住区を囲む尾根軸上の緑道の帯は、放射型の機能軸に乗り越えられる形で姿を消す。この6202案に見られる東側尾根筋の帯は、港北NTのグリーンマトリックスシステムの萌芽と見なすこともできそうではあるが、その結実には時期尚早で、立地の地形も、放射状に伸張する機能軸を妨げるほど急峻ではなく、環状の機能の帯を維持できるほど明瞭な形状をもってはいなかった。

## 7. おわりに

高蔵寺NTにおいて、機能の軸を集約し高密度高層住棟で尾根筋を形作る“骨太”の計画が何故実現できたか？その背景には、立地の自然環境、特に地形が大きく関与していた。

現在、初期のNTの集合住宅団地では、老朽化した集合住宅団地の建替えが共通課題となっている。その再生に際しては、かつての開発計画が新たな計画の基盤となり、現在の団地の空間構造を規定していた自然環境が建替えと切り離され遊離してしまわないよう、十分配慮する必要がある。とくに近年、土木技術や機械の発達とともに一見克服されたかのようにみえる自然環境が「過去最大」の自然災害として生活圏内で姿を現わしている。例えば、震災により丘陵地に開発された造成住宅地の切盛境界で被害が発生し、集中豪雨により盛土部が地滑りするなどの場面を、私たちは目の当たりした。すでに一度開発されたNTの人工の土地に再度手を加える第2の開発がはじまっているが、かつての計画を再考してその意図を継承し、自然環境構造の把握と十分な配慮の元に技術が適切に用いられる必要がある。また単に専門家に留まらず、居住する市民に対しても、自然環境と計画に関わる情報が共有されなければならない。その意味で、地域の自然環境構造を現代的に再生させる計画・デザインの手法が問われているといえるのではないだろうか。

**謝辞:** 本論を取りまとめるにあたって、元UR、元広島大学教授の津端修一先生、大阪府立大学の武田重昭先生に、多大なご協力を賜った。ここに記して感謝の意を示す次第である。なお本研究は科学研究費基盤(C)「ニュータウンに内在する自然環境を継承・再編するランドスケープ計画モデルの構築に関する研究」(課題番号25450511)による研究の成果である。

## 補注及び引用文献

- 1) 篠沢健太・宮城俊作・根本哲夫(2008):千里ニュータウンの公園緑地内に内在する自然環境の構造とその発現形態:ランドスケープ研究,71(5),773-778.
- 2) 根本哲夫・宮城俊作・篠沢健太・岩本美美代(2009):初期公団住宅の団地に内在する自然環境の構造とその発現形態:ランドスケープ研究,72(5),809-814.
- 3) 宮城俊作(1996):地域環境構造を内化する集合住宅地のオープンスペース計画-多摩ニュータウン・稲城長峰地区のケーススタディー.日本都市計画学会学術論文集31,91-96.
- 4) 木下剛・宮城俊作(1998):港北ニュータウンのオープンスペースシステム形成過程における公園緑地の位置づけ:ランドスケープ研究61(5),721-726.
- 5) 篠沢健太・宮城俊作・根本哲夫(2007):千里ニュータウンにおける集水域の構造変容と公園緑地系統の関連:ランドスケープ研究70(5),647-652.

- 6) 城地園子(2010):黎明期のニュータウン開発計画における自然環境の取扱い方-高蔵寺ニュータウンを事例として-:奈良女子大学大学院人間文化研究科住環境学専攻修士論文,184pp.
- 7) 高山英華編(1967):高蔵寺ニュータウン計画:鹿島出版会,254pp.
- 8) 村田孝(1966):高蔵寺ニュータウンにおける公園緑地の計画:造園雑誌30(2),27-32.
- 9) 権奇燦・安部大就・増田昇・下村泰彦・山本聡(1994):住民意識調査を通じたニュータウン内の保存緑地が保有する各種の効果に関する研究:造園雑誌57(5),187-192.
- 10) 西山康雄・石浦裕治(1989):高蔵寺ニュータウンの変容-日本型ニュータウン像の検討のために-:日本都市計画学会学術研究論文集24,541-546.
- 11) 山元貴継(2009):高蔵寺ニュータウンの開発と地形改変:都市地理学4,51-61.
- 12) 津端修一(2010):高蔵寺ニュータウンから豊かな暮らしの輪をつなぐ:都市計画284,80-85.
- 13) 日本住宅公団中部支社(1981):高蔵寺ニュータウン20年の記録:361pp.より引用した.
- 14) 東京大学高山研究室・日本住宅公団(1961):高蔵寺ニュータウン開発基本計画:119pp.
- 15) 前掲書7),46-47.
- 16) 前掲書7),p56.
- 17) 前掲書7),p56.
- 18) 前掲書7),46-47.
- 19) 日本住宅公団名古屋支所(1964):高蔵寺ニュータウン計画総合調整ならびに基本計画の検討.63-88.
- 20) 篠沢健太・宮城俊作・根本哲夫(2006):千里丘陵の開発における地形の取り扱いと自然環境の構造:ランドスケープ研究69(5),817-822.
- 21) 前掲書7),69-70.
- 22) 前掲書5)